

ふえる・ます

大島資生

1. はじめに

「ふえる」と「ます」の意味・用法については、従来、森田1977、中村1979、柴田編1979に分析がある。ここでは、これらの分析を参考にしつつ、更に詳細な記述を目的として、分析を進めたい。なお、「ます」は同形の他動詞もあるが、ここでは、自動詞のみを取り上げる。

2. 従来の記述

2.1. 森田1977

森田1977は、「ます」についての分析を中心に、「関連語」として「ふえる」「ふやす」にもふれている。まず、「ます」については、「全体的に量が多くなること (p.422)」と記述する。そして、「増す」には「川の水が増す」のような“量の増大”から「スピードが増す」のような“程度の増加”までであるが、「増す」の表わす程度性は、“その主体が内蔵し、身に帯びている事柄を量的にはかる”という観念があり、量としての増減が表わす程度である (pp.422~423)」と述べる。また、「増す」は、「川の水が増す」「実力が増す」のように、そのもの自体の量や程度が結果として増大したという気持ち (p.423)」であるとしている。一方、「ふえる」については、「数量意識が強く、“物の数が加わり多くなる”意識である (p.423)」という。また、「ふえる」は「具体的に数量が一つ、二つ、三つ…と増加していく意識が強い (p.424)」としている。

なお、中村1979も、ほぼ森田1977と同様の分析をしている。

2.2. 柴田編1979

柴田編1979では、まず、「ふえる」と「ます」のとり主体について考察する。

- (1) にきび (こじわ・白髪) がフエル。
- (2)[×] にきび (こじわ・白髪) がマス。
- (3) 駅の周辺にパチンコ屋がフエタ。
- (4)[×] 駅の周辺にパチンコ屋がマシタ。(p.182)

このような例から、「フエルが使えるのは、主体が… (中略) …<個別的に数え得

る具体物〉の場合であり、その〈数〉が問題になっている (p.183)」とする。

(5)^x スピード (速さ・速度) がフエル。

(6) スピード (速さ・速度) がマス。

(7)^x 信用 (人気) がフエル。

(8) 信用 (人気) がマス。(p.182~183)

他方、「マスが使えるのは、主体が… (中略) …〈個別的には数えられない抽象物〉の場合であり、その〈程度〉が問題になっている (p.183)」としている。さらに、次のような例も挙げている。

(9) 輸出が昨年より三割フエタ。

(10) 輸出が昨年より三割マシタ。(p.184)

そして、前の例と合わせ、「フエルは主体を〈数・量〉としてとらえている」と述べる。マスについても、「マスの主体は〈程度・量・数〉」としている (以上 pp.184~185)。

次に、柴田編1979では、「ます」と「ふえる」はどちらも、ある〈状態変化〉を表わす動詞であると規定し、両語が、この状態変化という事象をどのようにとらえているかについて考察する。

(11) 体重が3キロフエタ。

(12) 体重が3キロマシタ。

(13) 体重が70キロにフエタ。

(14)^x 体重が70キロにマシタ。(p.186)

このような例から、「フエルに比べてマスは積極的に〈量の増加分に注目する〉」としている。そして、そのことはまた、「マスがある程度の量の存在を前提としていることにもなる」が、フエルの場合、「マスに比べればその前提の意識は弱い」と述べている。また、フエルは(11)のように、増加分について言う場合も、「〈全体〉が〈大になる〉という観点からとらえている」としている (以上 p.186)。さらに、次のような例も挙げている (判定は柴田編1979による)。

(15)[?] 字数が5字フエルごとに料金も20円追加される。

(16) 字数が5字マスごとに料金も20円追加される。(p.187)

(15)が言いにくいことも、フエルが、「〈全体〉が〈大になる〉」観点からの表現であることから説明できる、としている。一方のマスは、(16)から、「〈増加分に注目する〉と同時に、その増加が〈段階的〉である (p.187)」とする。

以上のような考察から、「ふえる」と「ます」の特徴を次のようにまとめている。

(17) フエル 主体について、その〈数・量〉が〈大になる〉。〈全体の増加〉と

いう観点からとらえる。

マス <程度・量・数> (主体) が<大になる>。<増加が段階的>で、
<増加分に注目する>。(p.187)

他に、両語に対応する他動詞「ふやす」「ます」についてもふれている。また、両語の文体差について、「ます」が文章語的であると指摘している (p.188)。

3. 分析

以下、便宜上、「ふえる」と「ます」について節を分けて考察し、適宜両語を比較する。

3.1. ふえる

柴田編1979でも指摘されていたように、「ふえる」は、ガ格に、個別的に数えられる具体物でも、個別的には数えられない抽象物でも、どちらでもとることができる。

(18) 最近 つまらない番組が ふえた。

(19) 最近 つまらない番組の数が ふえた。

どちらの場合も、柴田編1979のいうように「<状態変化>」を表わす文ではある。しかし、注意すべきなのは、(18)において、変化するのは、「つまらない番組」自体ではないということである。(18)は、「つまらない番組」という名詞句によって指示されるもの(番組)の数が大きくなった、と解釈すべきであろう。他方、(19)は、「つまらない番組の数」と、「数」が明示されており、その「数」自体の変化を表わす、と解釈できる。

(20) にきびが ふえる。

(21) パチンコ屋が ふえる。

(22) 受験者が ふえる。

(20)(21)(22)は、いずれも、(18)と同様、ガ格に立つ名詞句の指示する事物の数について、その大きさが大になることを表わしている。また、「ふえる」には次のような用法もある。

(23) にきびの数が ふえる。

(24) 最近 家庭で消費される調味料の量が 急に ふえた。

(23)は「にきびの数」、(24)は「調味料の量」が、それぞれガ格に立っており、「数」「量」自体の変化を表わす。このように、「ふえる」には、「ガ格に立つ名詞句の指示する事物の数が大になる」(18)(20)(21)(22)という用法と、「ガ格に立つ数・量が大きくなる」(19)(23)(24)という用法がある(以下前者を「ふえる1」、後者を「ふえる2」と呼んで区

別する)。森田1977、柴田編1979では、「ふえる」について、このような区別を考えていなかったが、(18)(19)などの用法の差などからも、やはり区別すべきものだろう。また、上では、「ふえる1」について、「事物の数」だけを見てきたが、次のような例はどうだろうか。

(25) ここ数年 家庭で消費される薬が 急に ふえた。

(25)には、微妙ではあるが、二つの解釈があると考えられる。(25)の一つの解釈は、「家庭で消費される薬の種類が多くなった」というものであり、もう一つは、「家庭で消費される薬の量が多くなった」というものである。前者は「家庭で消費される薬」の数つまり何種類かということの大きさの変化について述べるものである。他方、後者は「～薬」という名詞句に、「薬の量」という読み込みをしているものと考えられる。このことから、「ふえる1」は、「数」だけではなく、「量」の変化についても用いられることがわかる。

ここで、「ふえる1」「ふえる2」がガ格にとる名詞句に対する制約について考えよう。まず、「ふえる1」は、上でみた、「にきび」「パチンコ屋」などの具体物以外にも、次のような抽象物もガ格にとることができる。

(26) 大病をわずらってから 田中氏は 欠勤が ふえた。

(27) 親が平気で自分の子供を殺すという事件が ふえている。

「欠勤」「事件」などは、具体物ではないが、「一回、二回…」という回数を単位として数えることができるものである。このことから、「ふえる1」は、「数えられる事物」であれば、抽象物でもガ格にとることができることがわかる。他方、「ふえる2」がガ格にとることのできるのは、具体物の数量に限られるようである。次の例を見よう。

(28)× スピードが ふえる。

(29)× 部屋の温度が ふえる。

(30)× 不安感が ふえる。

(31)× 実力が ふえる。

上の例の「スピード」「実力」などは、とらえ方によっては、「量」とも考え得るものであるが、抽象物であるために、不適格になっている（「スピード」「実力」などのとらえ方については、次節で詳しく述べる）。ところが、次のような例がある。

(32) 体重が ふえる。

(33) 予算が ふえる。

「体重」も「予算」も、それ自体は、具体物ではない。だが、これらは、それぞれ「体」

の「重さ」という側面での変化、「予算（＝将来使われるべき金）」の「金額」という側面における変化ととらえることができる。つまり、これらの文においては、「体」「金」という具体物が想定されており、それについての表現であると考えられるのである。みなみにこれらは、「ます」とおきかえが可能である。

(34) 体重が ます。

(35) 予算が ます。

以上のことから、「ふえる」の意味的特徴を、構文とともに次のようにまとめる。

(36) ふえる

構文： NPが ふえる（「ふえる1」「ふえる2」共通）

意味的特徴

ふえる1： NPの指示する事物の数・量が大になる。

ふえる2： NPの指示する数・量が大になる。（ただし、NPは具体物の数・量）

なお、森田1977では、「ふえる」について、「物の数が加わり多くなるという意識が強い（p.422）」としているが、「ふえる」には、次のように「自己増殖」を表わす場合がある。

(37) ガン細胞が ふえる。

(38) 雑草が ふえる。

森田の言うように「物の数が加わり多くなる」としてしまうと、「他から付加される」という解釈が生じてしまい、これらの例が扱えなくなる危険性がある。そこで、ここでは、「数・量が大になる」という記述にとどめた。

3.2. ます

前節で挙げた例文(28)(29)(30)(31)は、「ふえる」を「ます」におきかえると、すべて適格となる。

(39) スピードが ます。

(40) 部屋の温度が ます。

(41) 不安感が ます。

(42) 実力が ます。

つまり、「ます」は、「ふえる2」と異なり、具体物の数・量以外のものもが格にとることができる。柴田編1979では、上の例の「スピード」「温度」などは、「程度」とし、量や数と対立するものとして考え、「ます」の特徴を、〈程度・量・数〉が〈大になる〉

としている。これに対し、森田1977は、「ます」について、「増す」の表わす程度性は、(中略)量としての増減が表わす程度である(pp.422~423)」としており、ガ格に量をとる場合と、程度をとる場合を、量をとる場合の方を中心として、統一的に考えようとしているようである。しかし、具体的にどのような記述をするかについては述べていない。このように、細かい点では異なっているものの、森田1977も、柴田編1979も、「ます」を基本的に「量の増加」と考える点では共通している。だが、「ます」を「量の増加」と考える場合、次のような例はどのように説明するのであろうか。

(43) 大人数になったので 部屋の狭さが ました。

(44) 時間とともに ろうそくの短さが ます。

これらの文の内容は、事柄としては、「増加」というよりもむしろ「減少」なのである。そこで、ここでは、「ます」を、「量の増加」ということよりも、「程度の高い状態」への変化としてとらえたい。そして、先の(39)(40)(41)(42)の例などは次のように考える。つまり、「スピード」「部屋の温度」「信用」「実力」などは、みな、ある一次元的なスケール(程度の低いものから高いものへと連続していくもの)としてとらえられるものである。たとえば、「スピード」ならば〔遅い→速い〕、「温度」ならば〔低い→高い〕、「信用」ならば〔うすい→厚い〕、「実力」ならば〔低い→高い〕というスケールとしてとらえる。そして、「ます」が表わしているのは、たとえば(39)であれば、「スピード」というスケールにおいて、ある状態(たとえば時速70キロ)から、それよりも程度の高い状態(たとえば時速100キロなど)へと変化が生ずる、ということである。

さて、次に「ます」がガ格にとる名詞句についてみる。

(45)^x にきびが ます。

(46)^x つまらない番組が ます。

(47)^x ストレスがたまると 酒が ます。

(48)^x 家庭で消費される薬が ます。

それぞれのガ格が「~の数」「~の量」といった形になっていれば適格となる。

(49) にきびの数が ます。

(50) つまらない番組の数が ます。

(51) ストレスがたまると 酒の量が ます。

(52) 家庭で消費される薬の量が ます。

「数」や「量」も、一次元的なスケールとしてとらえられるものである。このことから、「ます」はガ格に、一次元的なスケールとしてとらえうる抽象物しかとりえないことがわかる。このように、数・量を表わす語句をガ格にとる点で、「ます」は「ふ

える2」と共通する。しかし、「ふえる2」と異なり、「ます」には、先にも述べたように、具体物の数量でなければならないという制約がない。

(53) スピードが ます。 (= (39))

(54) 部屋の温度が ます。 (= (40))

(55) 不安感が ます。 (= (41))

(56) 実力が ます。 (= (42))

上の観察から、「ます」の意味特徴を次のようにまとめる。

(57) ます

構文： NPガ ます

意味的特徴： NPの指示する事物に関して、ある状態から、より程度の高い状態への変化が生ずる。

(ただしNPは、一次元的スケールとしてとらえることのできる事物)

ところで、柴田編1979では、次のような例を挙げている。

(58) 体重が3キロマシタ。

(59)[×] 体重が70キロにマシタ。(p. 186)

これらの例から、柴田編1979では、「ます」は「〈変化の増加分〉についてしか言えず、「フェルに比べてマスは積極的に〈量の増加分に注目する〉(p. 186)」としている。だが、(59)を次のように補うとどうだろうか。

(60) 体重が 67キロから 70キロに ました。

まだやや抵抗があるかもしれないが、(59)よりもいくらか許容度が高くなる。次の例も同様である。

(61)[×] 砂糖の量が 4グラムに ます。

(62) 砂糖の量が 3グラムから 4グラムに ます。(中村1979)

このように、「ます」においては、変化の結果のみを明示した(59)(61)が不自然であるのに対し、変化前の状態と変化後の状態の両方を明示した(60)(62)がいくぶん自然になる。これは、「ます」が、一次元的スケールの上での、ある状態(変化前の状態)からある状態(変化後の状態)への変化を表わすこと、したがって、変化の過程全体に注目する表現であることのためだと考えられる。つまり、変化前の状態と変化後の状態の両方を示せば、変化の過程全体に焦点をあてた表現となり得るが、変化後の状態だけを示したのでは、変化の結果のみに焦点をあてることとなり、焦点にズレが生じる。そのために不自然になるのであろう。そこで、柴田編1979の、「ます」が「〈変化の

増加分〉についてしか言え」ない、という観察は妥当ではなく、(59)が不自然であるのは、「ます」が変化過程全体に注目する表現であることによる、と考えられる。なお、「ふえる」は、変化後の状態のみでも、変化前の状態と変化後の状態の両方をとっていても可能である。

- (63) 体重が 70キロに ふえた。
- (64) 体重が 67キロから 70キロに ふえた。
- (65) 砂糖の量が 4グラムに ふえた。
- (66) 砂糖の量が 3グラムから 4グラムに ふえた。

これは、「ふえる」が、単純に「変化する」事だけを表わし、特に変化の過程に注目する表現ではないためであろう。

もう一つ、(58)のように「増加分」を表わす語句が現われる場合を考えておきたい。

- (67) 体重が 3キロ ました。(=(58))
- (68) 予算が 400万円 ます。
- (69) パチンコ屋の数が 二軒 ます。

これらは、「ふえる」を用いた文に比べると、やや不自然であると感じられる。

- (70) 体重が 3キロ ふえた。
- (71) 予算が 400万円 ふえる。
- (72) パチンコ屋の数が 二軒 ふえる。

この現象の理由を考えるために、次のような例を見てみよう。

- (73) 予算が 30% ました。
- (74) 受験者の数が 二割 ました。

(73)(74)にも増加分を表わす要素が現われているが、どちらもごく自然な文である。これらの例が表わすのは、変化前の状態における量に対して、「30%」「二割」だけ変化したということである。したがって、変化前の状態における量が意識されており、それを基準として、どれだけの量が増加し、そして、変化後の状態がどうなるか、という点についても—明示的にではないが—示していると考えられる（それぞれ、変化前の「100」に対して「130」、変化前の「10」に対して「12」）。つまり、変化過程全体に焦点を当てているのだと考えられる。(67)(68)(69)に戻って考えよう。(67)(68)(69)の「3キロ」「400万円」「二軒」といった、具体的な数量は、絶対的な増加の量を示すだけで、(73)の「30%」のように、[変化前の状態—変化量—変化後の状態]という、変化過程全体に焦点を当てるものではない。そのために、表現の焦点にズレが生じ、不自然に響くのだと考えられるだろう。なお、柴田編1979では、「増加分」に関する議論に関連

して、次のような例を検討している。

(75)[?] 字数が5字フエルごとに料金も20円追加される。

(76) 字数が5字マスごとに料金も20円追加される。(p.187)

そして、「マスは<増加分に注目する>と同時に、その増加が<段階的>であることが分かる(p.187)」と述べている。だが、この例における「段階的」という意味合いは、「ごとに」という語句から出て来るものであって、「ます」の特徴ではないと思われる。従って、「段階的」という特徴は、「ます」自体が持つものではないと考えられる(また、(75)も、それほど悪い文であるとは感じられず、(76)と対照させることには疑問がある)。

4. おわりに

以上、従来の研究をふまえながら、より詳細な記述を目的として、分析してみた。そして、「ふえる」が基本的に「数量の変化」についての表現であるのに対し、「ます」は「程度の変化」についての表現であると考えた。最後に、上で抽出した「ふえる」と「ます」の意味特徴を再掲しておく。

(77) ふえる

構文： NPが ふえる (「ふえる1」「ふえる2」共通)

意味的特徴

ふえる1： NPの指示する事物の数・量が大になる。

ふえる2： NPの指示する数・量が大になる。(ただし、NPは具体物の数・量)

(78) ます

構文： NPが ます

意味的特徴： NPの指示する事物に関して、ある状態から、より程度の高い状態への変化が生ずる。

(ただしNPは、一次元的スケールとしてとらえることのできる事物)

／参考文献／

- 柴田武編1979 『ことばの意味2』 平凡社
中村正裕1979 「ふえる・ます」『日本語研究』第2号所収
森田良行1977 『基礎日本語1』 角川書店

言語経歴 1963年1月東京都豊島区生

(おおしま もとお・東京都立大学大学院学生)